

《書評》

Colm Tóibín,

*Mad, Bad, Dangerous to Know:
The Fathers of Wilde, Yeats and Joyce*

New York: Viking, 2018.

岩田 美喜

本書は、オスカー・ワイルド、W. B. イェイツ、ジェイムズ・ジョイスというアイルランドを代表する作家・詩人たちを、彼らの父親との関係から描き出す書物であるが、通常の意味での「伝記研究」とは趣を異にしている。本書には、例えば精神的な立場からワイルドの人生と作品を考察したメリッサ・ノックスの『オスカー・ワイルド——長くて、美しい自殺』(Melissa Knox, *Oscar Wilde: A Long and Lovely Suicide*, 1994) のように明確な批評的視点がある訳でもなければ、歴史家 R. F. フォスターによる二巻本の大著『W. B. イェイツ——その生涯』(R. F. Foster, *W. B. Yeats: A Life*, 1997-2003) のような資料的価値がある訳でもない。では、一見取り留めのない雑談のようにも見える文体で、作家とその父親に関する挿話が次々に開陳される本書にも、何らかの系譜があるとすれば、本書はどのような文脈の中で生まれたのだろうか。

本書の元となったのが、著者コルム・トビーンが2017年にエモリー大学で行った「リチャード・エルマン連続講演」であるという背景を知れば、明敏な読者はすぐに、エルマンによる『ダブリンの四人』(Richard Ellman, *Four Dubliners*, 1987) を思い出すかも知れない。エルマンは、1982-85年の4年間にわたりアメリカ国会図書館で、ワイルド、イェイツ、ジョイス、そしてサミュエル・ベケットについての連続講演を行い、のちに『ダブリンの四人』として出版した。その序文の末尾に彼は、「エモリー大学にて1985年6月27日」と記し、自らの最後の職場に敬意を表している。また大

学の側でも、エルマンの没後、その名を冠した連続講演を継続的に行うことでそれに応えてきた。エルマン自身の『ダブリンの四人』を淵源に、シェイマス・ヒーニー(1988年)、デイヴィッド・ロッジ(2001年)、サルマン・ラシュディ(2004年)などの名だたる作家／批評家による講演に連なるのが、本書であるといえよう。

ただし、講演などを下敷きとした評伝の執筆は、トビーンにとって特に新しいことではない。彼はすでに、様々な機会に発表した講演原稿や書評誌(主に『ロンドン・リヴュー・オヴ・ブックス』)への寄稿原稿を、『母親を殺す新手法——作家とその家族』(*New Ways to Kill Your Mother: Writers and Their Families*, 2012)として刊行している。だが、『母親を殺す新手法』に収められた文章の数々が、その発表の機会も対象となる作家も多様であったのに対し、本書は連続講演としてアイルランド作家とその父親に射程を絞って述べた原稿を元にして分、より焦点化されている。だが、さらに顕著な本書の特徴は、トビーンが必ずしも批評家として語っているわけではない点にある。本書における著者は、自身もまた一人のアイルランド作家として、文学都市ダブリンの過去と現在を鮮やかに交差させ、おのれの声でもって父親たちと作家たちの姿を再創造しているのである。

単行本化にあたって加えられた「序文」が、このような著者の視点を明らかにしてくれる。この奇妙な序文は、本書を体系的に俯瞰するようなものではない。「ダブリンにはひととき強い磁場を持つ通りがいくつかある——この街に住む時間が長くなり、あてどない記憶や連想が積み重なるほどに、磁場の層も厚くなってゆく」(1)という所感で始まるこの序文が提示するのは、遊歩者の視点である。著者は、ページの上でダブリンの街をぶらぶらと歩きながら、個人的な記憶と集合的／歴史的／文学的記憶が重なり合いながら複雑な意味のネットワークを形成していくさまを描き出す。

たとえば、キルデア通りのアイルランド国立図書館前を通り過ぎつつ、著者は『ユリシーズ』のステイーヴン・ディーダラスがハムレットの父の幽霊について論じたのはここだったと思い、1973-75年には自身も毎週ここへ通っていたこと、1975年に黄色い自転車を盗まれたこと、1974年にサウス・レンスター通りでIRAの爆弾テロが発生した際には図書館のリーディング・ルームにいたことなどを回想する……といった具合である。行き当

たりばったりにダブリン市中を歩き回り、自由連想法的に記憶を彷徨わせる著者の姿から、読者は本書の読み方を提示される。我々は、整理分類された〈知識〉としてではなく、角を曲がりしなみに人にぶつかるような〈経験〉として、サー・ウィリアム・ワイルドやジョン・バトラー・イエイツらと出会わなければならないのだ。

オスカー・ワイルドとその父サー・ウィリアムを扱った第1章(本書に章番号はないが、ここでは便宜的に三つの章に通し番号を振る)は、著者トビーンがかつてのレディング監獄を訪れ、ワイルドが収監されていた独房で午後を過ごす場面から始まる。彼は、そこで『獄中記』を朗読しようとするが、「ワイルドがこの孤独の中で書いた文を声に出して読むとなると、どのような音調になるべきなのか、分からなかった」(30)という問題に突き当たる。だが手探りで朗読を続けるうち、著者は行間から滲み出る、ワイルドがクイーンズベリー公爵に対して抱いていた軽蔑の念と、自らの階級への誇りを感じ取る。

これは、一代限りの勲爵士の息子が公爵に対して抱くには、奇妙な感情のように思える。だが著者によれば、ワイルドは独自の階級観を持っており、『獄中記』で彼は、彼自身の機知と才覚が単なる属性ではなく、それ自身一種の社会階級であることを示唆(32)していた。トビーンのこのようなワイルド理解は、『獄中記』にほとんど父サー・ウィリアムへの言及がなく、ワイルドが父親にさしたる興味を示さないことと符合する。ところが著者はさらに連想を広げる——それでいて、ワイルドと彼の両親は、なんと良く似た裁判に巻き込まれたことかと。

よく知られていることだが、サー・ウィリアム・ワイルドは、同僚の娘であり元患者であるメアリ・トラヴァーズと難しい関係になった挙句、彼女から様々な嫌がらせを受けるようになった。その行動に対して抗議の手紙を書いたレイディ・ワイルドは、1864年に誹毀罪で彼女から訴えられるが、一家の古い友人であったはずのアイザック・バットが原告側の弁護人を引き受け、夫妻の敗訴となった。息子のワイルドもまた、恋人ボウジーことアルフレッド・ダグラスの父クイーンズベリー公爵から常軌を逸した嫌がらせをされ、ワイルドの方で彼を訴えるも、トリニティ・カレッジの同窓生エドワード・カーソンがクイーンズベリー公爵側の弁護人を務めた。裁

判中にワイルドが見せた超然とした態度も、審理中の母親を彷彿とさせるなど、二つの裁判には多くの共通点があった。

だが、裁判後の親子の運命は、似ているどころかきわめて対照的である。ワイルド夫妻は敗訴によって社会的生命を失うこともなく、父はその後考古学への興味を追求し、『コリブ湖——その岸辺と島々』(*Lough Corrib, Its Shores and Islands*, 1867)を出版するが、ワイルドは2年間の強制労働のうえ、出獄後はパリで客死となった。ここでトピーンは、『コリブ湖』の脚注に「著者、およびその息子オスカー」という語を含んだ短い脚注があることに言及し、「アイルランド西部の離島を父親と共に散策し……スケッチをする彼の姿は、彼の新しい側面である」(71)と述べている。伝記研究的な見地から言えば、これはもちろん新発見ではない。少年時代のワイルドが父親と遺跡巡りをしていたことは、種々のワイルド伝や、エルマンの『ダブリンの四人』でも語られている。ここで重要なのは、ワイルドとその親の数奇な符号に思いを馳せた著者が、少年ワイルドに「新し」く出会い直した、ということなのであろう。

このような、著者の心的経験を通じた作家たちとの(再)遭遇は、W. B. イェイツとその父J. B. イェイツを扱った第二章でも鮮やかに描き出されている。この章でトピーンは「眼差し」(*gaze*)という単語をキーワードに、自らがニューヨークの図書館でJ. B. イェイツの書簡を閲覧していた際に遭遇した、その道の大家ウィリアム・マーフィーの眼差しから筆を起こし、彼の伝手で目にしたJ. B. イェイツ最後の自画像の眼差しを描写する。さらには、その自画像を描いていた時期にJ. B. イェイツが愛する女性ローザ・バット(上述のアイザック・バットの娘)に向けてアメリカから送り続けた恋文を縦横無尽に紹介しながら、彼が大西洋を挟んで彼女に向けていた眼差しを探る。しかしそこには常に、2008年に没した先達の研究者ウィリアム・マーフィーに著者が向ける、一種の愛惜の眼差しが重ねられているのである。

唯一毛色が異なっているように見えるのはジョイス親子を扱った第三章で、この章では著者自身の姿が表面から消えている。内容としては、まず父親ジョン・スタニスラス・ジョイスの実像をジョイスの弟スタニスラス・ジョイスによる回想録から描出し、章の後半ではジョイスがいかに自分の

文学の中で、家族を苦しめるばかりだった父親を文学的に昇華し、変容させたのかを、作品分析を通じて示すものである。ジョイスが文学の中で〈父親〉を再創造する過程を、『スティーヴン・ヒーロー』と『若き芸術家の肖像』を読み比べながら検証するくだりなどは興味深いが、これまでの二章に比べるとかなり堅実な調子なので、突然の路線変更には戸惑わないでもない。ひょっとしたら、作家の主体を前面に押し出す奔放な書きぶりが続いたので、著者自身のバランス感覚がブレーキをかけてしまったのかも知れないなどと勘ぐってしまう。

もちろん、それぞれのスタイルにはそれぞれの良さがあり、批評家的な筆致で書かれたジョイスの章も非常に面白く読める。だが、もしも、アイルランド作家コルム・トビーンでなければ書けない評伝があるとするれば、やはりそれは著者の主観を意図的に顕在化させた最初の二つの章ということになる。そこで我々読者は、「記録」もまた「記憶」から自由ではなく、我々は皆誰かの記憶を通じて過去と出会い続けるよりほかないということ、痛感するのである。